仁科記念財団

案　内

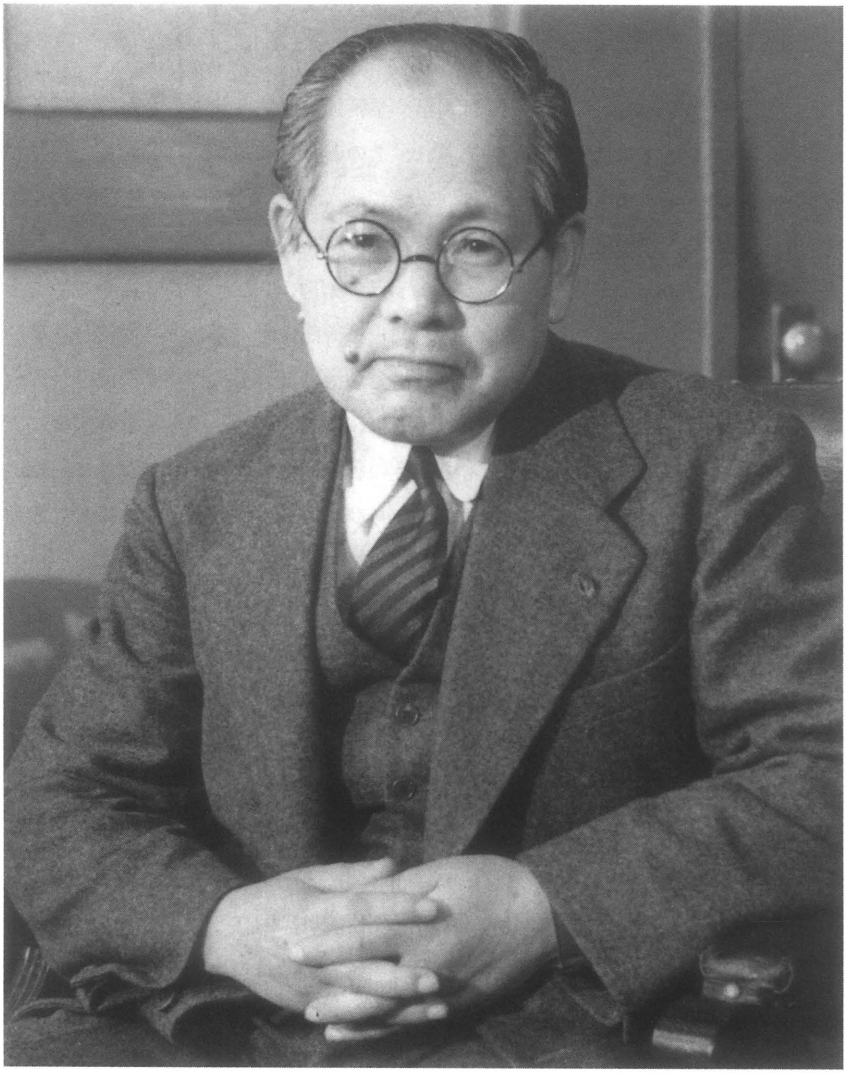
2003年6月

財団法人　仁科記念財団

博士は岡山県に生まれ，東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後，理化学研究所に入り，1921年渡欧，1923年より1928年まで当時原子物理学の中心であったコペンハーゲンのボーア教授のもとで研究した。1928年クラインとともにディラックの相対論的量子力学に基づき，ガンマ線の電子による散乱に関する有名なクライン-仁科の式を導いた。帰朝後，量子力学，原子核物理学等，当時急速に展開した新しい原子物理学をわが国に育てることに力をつくした。湯川教授の中間子論，朝永教授の量子電気力学をはじめとするわが国の理論物理学，また原子核，宇宙線の実験的研究の発展は仁科博士の指導と励ましに負うところが多い。博士みずからは，戦前理化学研究所に当時世界最大と称せられたサイクロトロンを建設したが，戦後占領軍によって東京湾に沈められた。

戦後，理化学研究所長として，また株式会社科学研究所社長としてわが国の科学技術の再建に尽瘁したが，不幸にも途半ばにして病をもって逝去された。

博士は1946年文化勲章を受け，1948年日本学士院会員となられた。



仁科芳雄博士（1890.12.6 - 1951.1.10）

仁科記念財団案内

仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として，わが国の原子科学の祖，仁科芳雄博士を記念して創立され，そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会を欠かさず行い，またその他いくつかの事業を続けております。財団の設立当初の基金は，わが国財界からの寄付金2,165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円から成るものでしたが，数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。しかし、朝永振一郎博士（当初は財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と，初代理事長渋沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により，財団の永続が図られ，その後数次の募金によって，今日では6億円余りの基金をもち，その利子で活動するようになりました。そして最近は，各界からいただく賛助会費ならびに個人の寄付金にも依拠して活動を続けています。

財団の存在の意義が広く認められ続けるためには，国内外の広い層からのご支持とご協力が必要であります。そして実際，今日まで活動を続けることができましたのは，古くからの財団関係者に限らず，多数のかたがたの温かいご支持とご協力のおかげであります。

そのようなご支持とご協力にこたえ，さらにその輪を広げることを念願して，われわれは1985年以来，この小冊子「仁科記念財団案内」を毎年発行しております。この小冊子の「案内」という名前は，戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にならってつけました。戦前の「理研」は，欧文と和文の研究報告の出版のほかに，毎年，各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な小冊子を出しておりました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という，かざり気のない名称は，当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が，すこしでも多くのかたに，仁科記念財団に対して親しみをもっていただき，支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

目　　次

理事長ごあいさつ……西島和彦…… 2

§1.　仁科記念財団の事業概要…… 3

§2.　仁科記念賞…… 4

§3.　仁科記念奨励金……13

§4.　仁科記念講演会……14

§5.　財団出版物……16

§6.　財団ニュース……16

§7.　仁科記念室だより……仁科浩二郎……17

財団法人仁科記念財団寄附行為……21

役員および評議員名簿……28

付　　録

a. 仁科記念賞受賞者一覧 ……29

b. 海外派遣研究者一覧 ……37

c. 途上国若手招聘研究者一覧 ……44

理事長ごあいさつ

平成15年４月

仁科記念財団理事長　西島和彦

1948年にコロンビア大学のラビ教授が東大で水素原子におけるラム・シフトや電子の異常磁気能率に関する実験結果についての講演を行った。この時にかつて共同研究者であった仁科芳雄先生が通訳兼解説を受け持たれた。これは私が先生をお見かけした唯一の機会であった。またその際に朝永先生が最前列に座っていて色々と質問されていたことが印象的であった。

仁科先生は1923年より1928年までコペンハーゲンにおいてニールス・ボーアの許で研究に従事されたが，特に1928年にクラインと共に導き出したクライン・仁科の公式は日本における量子電磁力学の発展の基礎となり，後に朝永先生の「くりこみ理論」として結実した。上述のラビの講演内容は正に朝永先生の研究の中心題目であった。また仁科先生は中間子にも大変興味を持たれ，湯川先生にもボーズ粒子としての中間子を考えるようにとの助言をされたと伺っている。ご自身でも宇宙線中に中間子を見つけようとして霧箱を使ってミュー粒子を発見されたことは有名である。先生は第一級の研究者としてヨーロッパから帰国されたが，単にヨーロッパの物理学を日本に持ち帰っただけではなかった。理論・実験両面にまたがる研究，研究者と組織の育成，サイクロトロン建設の時に発揮されたローレンスとの密接な国際協力，アイソトープと関連した生物学・医学の研究への関心などで示されたように日本人離れしたスケールの大きさは，当時最高の研究場所であったコペンハーゲンで感じた文化的そして精神的息吹きを伝導者として日本に伝えるべく帰国されたからであるように感じられる。

戦後間もなくこの様な一連の大事業の最中に先生が働き盛りの60歳で亡くなられたことは誠に残念である。そこで先生の学術文化に対する功績を記念し，その精神を受け継ぎ，原子物理学を中心とした学術の発展に寄与することを目的として1955

年に仁科記念財団が設立された。財団の発展に尽くされた歴代の理事長の渋沢敬三・朝永振一郎・久保亮五の諸先生方および財団関係者の皆様のご努力のお陰で財団も間もなく創立五十周年を迎えようとしている。財団が更に日本の学術の発展に貢献できるように皆様方のご理解とご支援とをお願いしたい。

§1. 仁科記念財団の事業概要

ホームページ（http://www.nishina-mf.or.jp）もごらん下さい。

1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して賞牌および副賞を贈呈します。

2. 仁科記念講演会の開催

広く原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し，かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催します。

3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが，現在は，仁科記念室および朝永記念室*にある多数の貴重な資料の整理を主としており，その成果を広く利用しやすくするための作業を行っています。

＊ 筑波大学にも「朝永記念室」があり，それと連絡しあっています。

4. 仁科記念奨励金の贈呈

a. 在外研究をする若い研究者に1年間の滞在費および旅費を支給します。

b. 発展途上国研究者の来日研究のために，同様な援助をします。

5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し，かつわが国の研究者と交流し，討論に参加していただきます。

6. 広報および調査

講演記録等を載せた“NKZ"および広報誌「財団案内」の出版，ならびに仁科博士，朝永博士をめぐる科学史資料の収集調査を行っています。

§2. 仁科記念賞

「仁科記念賞は，原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。**この賞の特色**は，功成り名遂げた大先輩に贈られるのでなく，むしろこれからの活躍を大いに期待される**若い研究者**に贈られる点にあります。」(“NKZ” 創刊号（1962）43ページより）

これまでの受賞者とその業績および当時の所属を巻末に掲げます。

平成14年度の仁科記念賞の受賞者と受賞業績を以下に紹介します。

2002年度第48回　仁科記念賞　受賞者業績紹介

受 賞 者　小山勝二（京都大学大学院理学研究科教授）

研究題目　超新星残骸での宇宙線加速

宇宙の超高エネルギー現象を示す典型的な現象である宇宙線のエネルギースペクトルはベキ関数で表され，人工の加速器を超える超高エネルギー領域まで伸び続けている。すなわち，太陽などの恒星やX線星などで通常的に生起している熱的平衡状態に基づく過程とは異なり，非熱的過程によって宇宙線粒子が加速されていることを示している。宇宙線の加速源は宇宙線の発見以来半世紀以上にわたって長らく不明であり，天の川銀河に閉じこめられている宇宙線の生成と散逸のエネルギー収

支勘定から，超新星爆発が宇宙線を加速するエネルギー源であると推定されてきた。一方，非熱的なベキ型スペクトルを自然に説明するモデルとしてフェルミの統計的加速が古くから知られている。衝撃波ではこの統計的加速機構が非常に効率的に働くことから，超新星残骸での衝撃波によって宇宙線加速が実現されているものと推測されてきた。しかしながら，超新星残骸における宇宙線粒子の加速を結論できる証拠をえることは長年の宿題として残されてきた。

超新星残骸は通常，衝撃波で加熱された高温プラズマからの，制動放射の連続スペクトルと多数の元素の輝線からなる熱的放射スペクトルを示す。しかし，西暦1006年に爆発した超新星残骸SN1006には輝線がなく，単純なベキ関数の非熱的スペクトルが観測され，その原因と放射機構は長らく不明であった。小山氏は，超新星残骸SN1006を，世界初の高感度X線分光撮像衛星「あすか」で精密観測し，元素の輝線を伴う熱的スペクトルが残骸の内側の部分に限られ周辺部の球殻部分ではベキ型の非熱的スペクトルを持つことを示した。従来の解釈に代わって，加速された超高エネルギー電子が衝撃波面で圧縮された磁場中で引き起こすシンクロトロン放射によってベキ型のX線放射を説明した。観測事実のすべてを矛盾無く説明し，超新星残骸において超高エネルギー領域まで粒子が加速されることを実証した。X線のスペクトルが20keVに及ぶこと及び電波の放射強度との比較からえられる磁場の強さに対する制限などを考慮して，シンクロトロン放射する電子が少なくとも200TeVを超える超高エネルギーまで加速されていることを示した。さらに，陽子では放射損失が無視できるから宇宙線の主成分である陽子はこの超新星残骸において電子以上に高いエネルギーまで加速されると結論できることを指摘した。このように，超新星残骸SN1006の観測結果と小山氏による解釈は超新星残骸が10^{15}eV近い粒子加速を行っていることを初めて実証した。引き続いて，「あすか」等のX線データによる銀河面のサーベイを行い，電波放射が弱くX線で明るい非熱的スペクトルを示すSN1006に似た別の超新星残骸RXJ1713.7－3946などを発見した。これらの超新星残骸においては，同じ100TeV以上の電子がシンクロトロン放射でX線を放射すると同時に，2.7Kマイクロ波光子をコンプトン効果で叩きあげてTeVガンマ線を生成することが予想される。実際に，TeV領域の超高エネルギーガンマ線が日豪共

同観測のCANGAROOグループによって検出され，超高エネルギー粒子加速が実際に起きていることが確認されている。

空間分解能のすぐれたX線衛星チャンドラの最新のデータによれば，超新星残骸SN1006の周辺部の非熱的スペクトル成分は薄いシート状のフィラメント部分から放射されている。加速が衝撃波面での電子や陽子の拡散過程による統計的加速によるとする通常のモデルに基づくと，拡散を記述する粒子の散乱長が磁場中のジャイロ半径程度に短く，極めて効率の良い加速が実現していることを意味している。これまで太陽惑星圏において行われてきた衝撃波加速の精密な実証的研究を一層広い空間的スケールと巨大なエネルギースケールを持つ超新星残骸へと拡大・発展させる契機となり，衝撃波加速についての観測的研究の新たな場を開拓・提供して，一層の発展を触発しつつある。

小山氏は，宇宙の超高エネルギー現象を示す典型的な現象である宇宙線の加速源を初めて具体的に特定し，衝撃波による粒子加速の研究を一層発展させる研究成果をあげた。超新星残骸SN1006の観測は多くの研究機関の研究者の共同研究であるX線衛星の観測に基づくが，その業績は小山教授の一貫した主導によることは明白である。

［参考文献］(受賞対象となる業績についての代表的論文)

●Evidence for shock acceleration of high energy electrons in the supernova remnant SN1006, K. Koyama, R. Petre, E. Gotthelf, U. Hwang, M. Matsuura, M. Ozaki and S. Holdt, Nature 378 (1995) 255－256

●Particle acceleration in SNRs, K. Koyama, Adv. Space Research 25 (1998) 681－687

受賞者　樽茶清悟　（東京大学大学院理学系研究科教授）

研究題目　人工原子・分子の実現

樽茶清悟氏は，半導体に最先端の微細加工を施すことにより，形状と電子数を精密に制御できる人工原子・分子を実現した．さらに，そのエネルギー準位を決定する電流測定法を確立し，磁場や形状により電子状態を変え，電子状態に及ぼす量子効果と電子間相互作用の効果を明らかにした．また，スピン三重項状態での抵抗異常の発見などにより，近藤効果の新しい側面を切り開いた．この研究はナノテクノロジーとナノ物理学分野に新しい潮流を生み出した．

樽茶清悟氏の開発した縦型人工原子は，半導体ヘテロ構造を用いて作製した２重障壁構造を円柱状に加工し，周りを金属ゲートで覆った構造をもつ．そこでは，電子を２重障壁により面状に閉じこめることにより２次元電子とし，さらに，ゲート電極に負の電圧を印加し電子をさらに面内で閉じこめることにより人工原子を作る．このとき，ゲート電極による閉じこめポテンシャルはほぼ２次元調和ポテンシャルと見なすことができる．電子数を０個から１個ずつ正確に変化するためには，2重障壁部分の半導体と井戸の部分の半導体の組成，厚みなどを精密に制御する必要がある．そのため，このようにして人工原子を実現できたのは世界中で氏の研究グループだけである．なお，円柱状から四角柱状へと人工原子の形状を変化させることもできる．また，障壁の数を増やすことにより，二つの人工原子からなる人工分子も作ることができる．この場合，人工原子の間の結合強度は障壁の高さと厚みでほぼ自由に変えられる．

まず，このような縦型人工原子に電子を追加するために必要なゲート電圧から電子のエネルギーを測定し，原子と同様に，人工原子でも殻構造をもち，フント則が成り立つことを示した［1］．さらに，ゲート電圧とソース－－ドレイン電圧の両方を変化させて電流を測定し，各電子数ごとに磁場の中の人工原子の励起状態のスペ

クトルを決定した［2］.さらに，人工原子のエネルギー準位を磁場により制御し，軌道準位が縮退する付近で一重項状態から3重項状態へ不連続に変化することを観測し，クーロン相互作用による交換エネルギーを定量的に決定することに成功した［3］.また，軌道準位がほぼ縮退し,1重項状態と3重項状態が縮退するときに，近藤効果が急激に強くなる現象を発見した［4］.量子ドットの近藤効果についてはいくつか理論的予言があり，その最初の観測はMITのグループにより行われたが，軌道縮退の近藤効果は新しい発見である．また,3重項状態の近藤効果は通常の金属では観測されていない新現象である.

2次元面内にゲート電極を配置することによって横型人工原子も作れる．横型人工原子の電子数を精密に決めることは難しいが，ゲート電圧により，電極との結合などをほぼ自由に制御できる特徴をもつ．この横型人工原子では，理論的に予言されていたユニタリ極限の近藤効果の観測にも世界で初めて成功した［5］.さらに，人工原子を組み合わせた横型人工分子を作り，分子状の結合軌道ができることを示し，マイクロ波の実験で，結合反結合軌道間の共鳴吸収を観測し，量子ビットができることを示した［6］.このような人工分子における電子間相関効果の研究ではさらなる発展が期待される.

以上，樽茶清悟氏は，精密に制御された人工原子・分子を実現し，その電気伝導現象を調べることにより,その電子状態,特に電子間相互作用の効果を明らかにし，新しい現象を発見した．これは，氏の独創的な発想と高度な実験技術によって初めて可能となったもので，学術的な価値の高い世界に誇るべき研究業績である.

［参考文献］

［1］ Shell filling and spin effects in a few electron quantum dot
S. Tarucha, D. G. Austin, and T. Honda, Phys. Rev. Lett. 77, 3613 (1996).

［2］ Excitation spectra of circular, few-electron quantum dots
L. P. Kouwenhoven, T. H. Oosterkamp, M. W. S. Danoesastro, M. Eto, D. G. Austin, T. Honda, and S. Tarucha, Science 278, 1788 (1997).

［3］ Direct Coulomb and exchange interaction in artificial atoms
S. Tarucha, D. G. Austin, Y. Tokura, W. G. van der Wiel, and L. P. Kouwenhoven, Phys. Rev. Lett. 84, 2485 (2000).

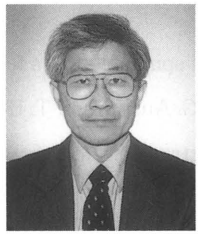
［4］ Kondo effect in an integer-spin quantum dot
S. Sasaki, S. De Franceschi, J. M. Elzerman, W. G. van der Wiel, M. Eto, S. Tarucha, and L. P. Kouwenhoven, Nature 405, 764 (2000).

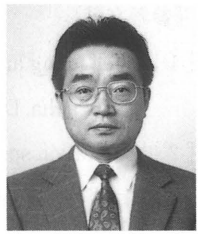
［5］ The Kondo effect in the unitary limit
W. G. van der Wiel, S. De Franceschi, T. Fujisawa, J. M. Elzerman, S. Tarucha, and L. P. Kouwenhoven, Science 289, 2105 (2000).

［6］ Microwave spectroscopy of a quantum-dot molecule
T. H. Oosterkamp, T. Fujisawa, W. G. van der Wiel, K. Ishibashi, R. V. Hijman, S. Tarucha, and L. P. Kouwenhoven, Nature 395, 873 (1998).

10

受賞者　永井泰樹
（大阪大学核物理
研究センター教授）
井頭政之
（東京工業大学原子炉工学
研究所助教授）





研究題目　原子核による速中性子捕獲現象の研究

恒星内温度に相当するkeV領域の中性子の原子核による捕獲反応は従来s波中性子の吸収過程が定説とされてきた。永井，井頭両氏は，原子核による中性子の捕獲断面積を精密に測定する新しい装置を開発し，これを用いた研究でp波の直接捕獲過程が存在し，それがs波の寄与よりもはるかに大きいことを実験的に初めて明らかにした。

恒星内の密度は地上の実験室における密度よりもはるかに高い。しかし，その恒星内で鉄以上の重い原子核は，原子核に1個の中性子が捕獲（吸収）される反応を通じ合成されている。同時に2個以上の中性子が吸収されることはない。そのため重元素合成が進行する恒星内温度に相当する温度を持つ中性子を地上実験室で用意できれば恒星内元素合成を再現できる。そこで地上で高速の中性子を作り原子核に衝突させて，新しい原子核が合成された証拠になる信号を高い感度で検出する。恒星内温度は,1億度から10億度程度であると考えられている。この温度に相当する中性子は10keV（キロ電子ボルト）から100keVのエネルギーを持っている（速度にすると毎秒1500－4500km)。そのような速中性子は実験室で小型のバンデグラフ型の加速器で,2MeV弱のエネルギーをもつパルス化された高強度の陽子を，リチウム7に照射して生成する。パルス陽子を使用するのは，中性子が電気を持っていないため磁石等でそのエネルギーを測ることができないので飛行時間差法を用いるためである。

質量数の軽い原子核がkeV中性子を捕獲する反応の断面積(捕獲断面積)は数マ

イクロバーンと極めて小さい。一方，この中性子と原子核の全反応断面積は数バーンもある。そのため新しい原子核の証拠となる真の信号と偽の信号の比は1対100万である。真の信号を如何に高感度で検出し偽の信号を如何に減衰させるか，これが地上実験の成否を握っていた。永井・井頭氏らは真の信号検出器として検出効率・エネルギー分解能共に優れたNaI（Tl）検出器を使用した。この検出器は軽い原子核に中性子が捕獲された際放出される不連続なエネルギーを持つγ線を検出できる。そしてこのγ線は生成される新しい原子核に特徴的であり，それを検出できれば真の信号を偽の信号から取り出すことができた事になる。しかしこの検出器は中性子捕獲断面積が大きい沃素を含むためkeV中性子の捕獲実験で成功した例は過去なかった。（従来，液体シンチレーション検出器が利用されてきたが真の信号識別能力が低く又中性子の偽信号のため有意義な結果は得られていなかった）。試料の原子核で散乱され多量の偽信号の要因となる中性子を如何に効率良く減衰させるかがポイントであった。（散乱される中性子はエネルギーを減じる。一方中性子の原子核に対する捕獲断面積は概ね中性子の速度が遅くなると，それに反比例して大きくなるので…熱中性子はkeV中性子の1000倍…検出器周辺に侵入する僅かの中性子も大きな偽信号を生む。）散乱された中性子は，リチウム6を含むリチウム・ハイドライドとボロン10を含むボロン入りポリエチレンを用い減衰させることに成功した。例えば前者では，試料で散乱されNaI（Tl）検出器に侵入してくるkeV中性子は，先ず水素との衝突で熱化され，そして熱中性子の捕獲断面積が非常に大きいリチウム6によってγ線等の新しい偽信号の要因となる生成物を作ることなく減衰する。この方法を開発した結果先に述べた極めて小さい中性子捕獲断面積を測定できたのである。

不連続γ線を検出する方法で得た^{12}C及び^{16}Oの結果は従来の値に比べ5倍及び170倍も大きい。これはkeV領域の中性子捕獲反応がs波の中性子を原子核が直接捕獲して進行するとの定説を覆す結果であり，p波の直接捕獲過程の存在を実験的に初めて明らかにすることとなった。

金属度の低い恒星内で^{12}C及び^{16}Oが重元素を合成するためのkeV中性子を大量に消費することが分かった。その結果，s過程による重元素の合成量が大きく減少

することが新たに判明し，「恒星進化と元素合成の模型」の再構築を迫るものとなった。更に^{16}Oは太陽系のｒ過程元素合成量の評価値も大きく変化させることになった。最近，富士吉田で開催された「原子核と宇宙」国際会議でも，その分野の世界的指導者であるS.Woosley氏が「^{16}Oの実験結果は，これまでに考えられた効果だけではなく，αフリーズアウトのｒ過程元素合成に加え，太陽系のｒ過程元素合成でも相当なる影響を与えるだろう」とのコメントを行った。すなわち，本研究により原子核によるkeV中性子の捕獲反応にｐ波の吸収過程が重要な寄与をすることが初めて明らかにされ，従来ｓ波の中性子吸収のみを考慮してきた元素合成模型の理論計算を全体的に根底から見直す必要を迫る結果となり，それが世界的に認知されたのである。

［参考文献］(受賞対象となる業績についての代表的論文)

●Y. Nagai, M. Igashira et al., Measurement of the neutron-capture rate of the ^{12}C (n, γ) ^{13}C reaction at stellar energy, Astrophysics J. 372 (1991) 683

●Y. Nagai, M. Igashira et al., Capture rate of the ^{7}Li (n, γ) ^{8}Li reaction by prompt gamma-ray detection, Astophysics J. 381 (1991) 444

●M. Igashira, Y. Nagai et al., Measurement of the ^{16}O (n, γ) ^{17}O reaction cross sections at stellar energy and the critical role of nonresonant p-wave neutron capture, Astrophysics J. 441 (1995) L89

●T. Kikuchi, Y. Nagai, M. Igashira et al., Nonresonant direct p- and d-wave neutron capture by ^{12}C, Phys. Rev. C57 (1998) 2724

●M. Rayet and M. Hashimoto, Astron. Astrophys. 354 (2000) 740

§3. 仁科記念奨励金

この研究奨励金は，わが国の若い研究者の海外での研究への援助(1956年度から)，および発展途上国の研究者の来日研究への援助（1992年度以降）にあてられております。

研究者の海外での研究への援助について述べますと，仁科記念財団が派遣する研

究者は，派遣された先の国で行われる研究の重要なメンバーとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたということが，先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて，ずっとよく研究能率向上に役立ったというのが，いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

海外派遣研究者は公募して選考します。滞在期間は１年とします。

発展途上国の研究者の来日研究への援助においては，受け入れをわが国の同じ分野のかたに担当していただき，入国ならびに滞在中のお世話をお願いしております。

科学研究の国際協力が今後ますます重要性を増すことを考えますと，仁科記念財団の上述の二つの助成の意義をことに若い研究者が深く理解し，それを活用するとともに，自らもその事業の発展に積極的に寄与することが望まれます。

2002年度は次の研究者にあてられた。

（１）平成14年度海外派遣研究者

氏　　名　住　貴宏（名古屋大，理，Ｄ３）
行　　先　アメリカ，Princeton University Observatory
研究題目　重力マイクロレンズを用いた銀河暗黒物質，銀河構造及び系外惑星の研究

氏　　名　西村まどか（CERN，理論部研究員）
行　　先　アメリカ，MIT
研究題目　超弦理論における双対性の超重力理論による研究

氏　　名　長谷川太郎（姫路工大，理，助手）
行　　先　アメリカ，National Institute of Standards & Technology
研究題目　イオントラップ中の冷却イオンと希ガス間のスピン移行の研究

（2）仁科フェローシップで来日した発展途上国の若手研究者

氏　　名　Dang Van Soa（ベトナム，ハノイ教育大）
滞 在 先　中央大理工　稲見武夫教授
滞在期間　2002年7月9日より6ヶ月
研究題目　素粒子論

氏　　名　Shu-Chiuan Chang（台湾，ニューヨーク州立大学院生）
滞 在 先　東京理科大理　鈴木増雄教授
滞在期間　2002年9月11日より6ヶ月
研究題目　統計力学

氏　　名　Zakaria Giunashvili　（グルジア，ラズマゼ数学研）
滞 在 先　横浜市大理　藤井一幸教授
滞在期間　2002年9月30日より6ヶ月
研究題目　量子情報理論

§4.　仁科記念講演会

仁科記念財団は，仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に，定例の記念講演会を東京で催すほか，地方講演，高校理科教員のための講演会，外国の著名物理学者の来日のおりとか例えば朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを，随時行ってまいりました。定例の仁科記念講演会は，すでに48回を数え，伝統を誇りうるものとなりました。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。それは一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからであります。そのような講演に，門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は，師の仁科博士におとらず公開

講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は，財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の出版物“NKZ"に掲載され，バックナンバーでそれらを読むことができます。

2002年度の講演会は次のように行われました。

第48回定例講演会

日時　平成14年12月13日（金）

場所　青山学院大学　ガウチャー記念礼拝堂

主催　仁科記念財団

講師　秋光純（青山学院大学理工学部教授）

題目　新しい超伝導体を追って

秋光教授，講演会場前にて

§5.　財団出版物

公開講演会は，仁科記念財団の重要な事業の一つですが，その講演会に来聴できなかった人のためも考えるべきであり，講演記録をぜひ出版する必要がある，というのが，初代理事長渋沢敬三氏の強い願望でした。われわれは講演会活動を活発に

し，行われた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして，出版されたものは，できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

§6. 財団ニュース

a. 小柴昌俊教授が2002年ノーベル物理学賞を受賞されました。心からお祝いを申し上げます。小柴先生は「超新星爆発に伴うニュートリノの検出」の業績により，1987年度の仁科記念賞を戸塚洋二氏，須田英博氏とともに受賞されています。仁科記念賞受賞者の中からノーベル賞受賞の栄誉に輝かれたのは，江崎玲於奈先生（1959年度）に続いて，二人目になります。

b. 仁科記念賞の賞牌（写真左）の制作にあたられた彫塑家，澄川喜一先生は，平成15年度日本芸術院賞・恩賜賞を受賞されました。心からお祝いを申し上げます。先生のお写真（右）は平成13年，
東京芸術大学学長当時のものです。

§7. 仁科記念室だより

仁科記念室では，仁科雄一郎・浩二郎両氏のご努力により，そこに永い間眠っていた仁科芳雄先生の古文書の発掘が進行しています。新しい「発見」の連続のようです。その生き生きとした様子を以下に綴っていただきました。

厖大で栄養になる資料

仁科　浩二郎

我々整理作業班（中根良平，矢崎裕二，仁科雄一郎，浩二郎）は現在，仁科記念室（もと理研37号館２F突き当たり）書類ケースの内容確認を行っています。父芳雄が残した資料に対する整理記録としては，文末に挙げた６つの労作が既にあります。いずれも丹念な敬服すべき集約ですが，今回の作業は資料(２)，(３)，(４)，(５)の概括的記述をもう少し具体化し，各資料の個別性が判断できるようにしたい，というのです。

今の段階で特に我々が注目しているのは，中根を中心として調べが進んでいる父芳雄宛，あるいは芳雄発の膨大な量の書簡で，そこに科学史上の進展を実感することができます。例えば1930年代，父宛て書簡の中で湯川秀樹博士は，「メソトロン」という呼び名を提案しながら中間子研究の状況を語って居られます。間接的な一般的伝聞としてならば筆者もこの史実を認識していましたが，具体的な当事者の言動に接するのは初めてです。

また1940年，大サイクロトロン技術の検証・吸収のために渡辺扶生，飯盛里安両先生と一緒に渡米した矢崎為一先生からの通信は，活き活きと現地科学者との交流を語っています。同先生がローレンス（U. C. Berkeley）のサイクロトロン実験室はもとより，米国の各大学を歴訪なさり，特にボストンでの会議ではラビ，フェルミに会ったこと。フェルミはその時の晩餐会で仁科・矢崎（ほか？）の対称核分裂発見を注目に値すると紹介し，加えて理研グループ（仁科，矢崎，江副，木村，井川）によるU237の発見はBerkeleyによる発見と独立であると語ってくれたので，

矢崎先生は出席者の注目を浴びて，照れたとの報告です（1940年10月書簡，下に掲載）。

理研グループはこのU-237発見の実験では小サイクロトロンを使った訳ですが，矢崎先生が別の書簡では，サイクロトロンビームにおける彼我の電流差をよく克服したものだ，とマクミランから褒められた，と記しておられる。さらに矢崎書簡によれば，マクミランは理研グループがNp発見の長蛇を逸した事実を取り上げ，具体的な分析操作上の考え違いが理由であると指摘したそうです。またBerkeleyの夜のコロキュウムでは，矢崎先生がなされた研究説明に対してローレンス，オッペンハイマー，アルバレ，マクミランらが褒めてくれ，セグレ，シーボルグが別刷りを要求したとの事。

以上の便りからは，「日中戦争・太平洋戦争下で産業技術のハンデイを背負いながら進行していた日本の現代物理の発展」，という類型的な概念や表現では包括し切れない，奥の深い人間交流を垣間見る思いです。

この５年後に，占領軍が理研サイクロトロン２基ほかを破壊した際に激烈に非難した米国科学者たちの名前もここに現れている。

書簡以外では，父が多くの講演会で示していた宇宙線の霧箱写真も出てきました。1940年ごろ，軍人会館（九段下）の壇上（おそらく『理研映画を見る会』）で繰り返しこのスライド内容を解説・講演していた父を，当時小学３年生であった筆者は思い出します。内容の理解は問題外でしたが，現在に比べてプレゼンテーションの小道具は随分と原始的（大量のガラス製スライドと大型ポスターの連続）だったように思います，会場には詰襟姿の大學生が溢れ，小学生の目からは威厳があって偉そうに見える聴衆でした。

また，広島・長崎の原爆被害調査の一環として，長崎で放射線計測に当たられた増田時男先生の郵便葉書も数枚あります。現地経過を鉛筆で毎晩書き記し，破壊された浦上天主堂の美しいスケッチなども書き添えて，不自由な現地で投函されたものです（敗戦の翌年の１月）。あの食糧難の状況下に現地で重い放射線計測器を担いで回られた，研究室員の労苦が偲ばれます。

我々の作業はすでに10ヶ月を経過し，長期戦の様相を呈しています。傷みそうな

試料をそっと扱いながら，一つずつ内容を確認し，この傷み易い資料の望ましい保存法は何か，と思いを巡らせます。資料が実に多様で，作業班が苦心して編み出した分類基準も，これから当たる記念室内の資料全てに適切とは限りません。諸賢の多くは引越し，ご退官の際の書類整理などから苦い実感をお持ちでしょうが，この種の資料整理では内容を丹念に読み始めますと所要時間がうなぎ上りに増えます。従って心を鬼にして深い検証をあきらめ，作業者の個人差が出ず，曖昧さのない，自明的な整理法はないか，と模索することとなります（整理作業の不確定性原理を認識した最適化!?）。

でも今回の資料は科学史上，貴重な内容を含むことは間違いないと考えられますから，あまり機械的に処理し過ぎては，何のための整理か判らなくなってしまいます。そこで現況をご紹介して，皆様からの声援を頂き，作業の糧としようと小文をものした次第です。（2003年５月11日）

［参考資料］

（１）岩城，玉木，島村，竹内（一），矢崎（裕），「３号館仁科資料の内容一覧」第２版（1991年３月），

（２）竹内（一），「記念室メモ」，1987年，第１版，その後1988年に２回改訂，

（３）竹内（一），「仁科記念室Ａ－３－６　資料」1991年５月，

（４）編者なし（竹内（一）と推察），無タイトル，Ｂ４版，引き出し内容図（碁盤の目に記入，（２）の補足資料と思われる）

（５）竹内（一），矢崎（裕），「仁科記念室　Ｂ－２－７　資料」，1991年４月（芳雄の学習ノート：コペンハーゲン時代のコロキュウムノート，およびハンブルグ留学時代のノートなど）

（６）竹内一，矢崎裕二「仁科芳雄博士に関する資料の現状」日本物理学会誌「仁科芳雄生誕百年記念号」1990，45，10月号，766

［注］今回の整理対象を（１）の流儀で表現すると，「37号館仁科資料」となりましょう。

The Somerset
400 Commonwealth Avenue
Boston, Mass.

拝呈、会議は今日が最終日でした。面白い記録が出来ましたから、其Copyを持って帰ります。会員約二百五十名、團体に記念撮影をしました。
ラビやフェルミに会ひました、晩餐会のスピーカーはフェルミでフィッションを
フィッシングとわざと書いた方を見せました。然し判り易くLiquid Model
の話をして今迄asymmetric fragmentsしか見付からなかったが最近の報告で
日本の仁科、矢崎がSymmetric fragmentをidentifyしたのは注目に値する
又Uは他に239になるが之はAbelsonとMcMillanが93を提へた
もう一つ早いNeutronで237が出来るが之又日本とBerkeleyとが独立に発見
した、と言ったので皆が私に眼を注いで恥しい(てれる)気がしました。
しかし沢山此方でfissionを見てゐるのでHarvard、Perdue、Columbia、Rochester
等の人と仲良くなる事の獲物でした。
プリンストンのTurnerが同じTableに居て握手したので一寸てれました。
M.I.T. HarvardのCyclotronを見せて貰ひ土曜日にVan de Graaffも見せて貰ふ心算です。
あんなに主張したのにKinneyのPumpは到頭買へない事になりました。
納期が遅い為めに渡辺さんが持って帰へれないのだ相です。仕方ありません。

The Somerset
400 Commonwealth Avenue
Boston, Mass.

今日ルーズベルトがボストンへ乗り込んで来るのにM.I.T.の帰途会ひました。
矢張警官の警戒は厳重です。
ヘベシーは到頭来ませんでした。
私は日曜に(渡辺さんは金曜、仮屋君は土曜に)ニューヨークに帰り
月曜の夜行でシカゴへ行き、フランクとデンプスターに会ひ度いと思ひますが
丁度選挙なので危いものです。此日はお祭騒ぎだ相ですから。
しかし四年に一度の此大騒を(シカゴのTribune Towerの張り出し)見るのもよい
見物だと思ひます。ローレンス兄等は来ませんでしたから、バークレーで再び
会へると思ひます。
兄をはじめ皆様の御健闘を祈り上げます。
敬具

昭和十五年十月三十日

矢崎為一

仁科先生
臺下

財団法人　仁科記念財団設立趣意書
並 寄附行為

委大第164号

財団法人　仁科記念財団

設立代表者　渋沢敬三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月５日

文部大臣　清瀬一郎

財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者，日本学士院会員故仁科芳雄博士は，わが国の原子物理学の創始者であり，湯川博士等，世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前，当時世界で第１級の大サイクロトロンを建設されたことは，そのサイクロトロンの悲劇的最後とともに，あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は，世界的な原子物理学者であったのみならず，戦後国歩艱難の時期に際しては，旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し，科学技術こそ国の救済復興の原動力であるという信念を貫かれ，身をもってこれを実践されました。博士はまた，この学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ，博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも，永く忘れることのできない点であります。

このように，わが国科学技術界の恩人であり，且つ，わが国が世界に誇るべき偉大な学者を永遠に記念するために，科学の振興，新鋭科学者の育成を目的として，その名に因んだ事業を興すことは，これからの日本にとって，まことに意義深いことと考えられるのであります。

おもうに科学技術の振興は，国の自立復興上，万難を排して成し遂げなければな

らない喫緊事であります。なかんずく，博士が生前心血をそそがれた原子物理学が，人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは，万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが，原子物理学は今日先進諸国においては，生物学，工学，農学，医学等に広く応用されるほか，生産技術の方面にも根本的変革をもたらしつつあり，この分野の著しい立ち遅れを克服することは，わが国が当面する重要課題の１つであります。

以上の趣旨により，今回私共は故仁科博士を記念し，原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として，仁科記念賞の授与，研究奨励金の交付，海外学者の招聘，研究者の海外派遣，記念文庫の設置，記念講演会の開催等の事業を行うために，広く各界からの御寄附を仰いできましたところ，国内及び海外各方面から多数の方々の御賛同をえて，ここに2000万円に達する募金をみるに至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和的利用が声高く叫ばれておりますが，その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり，本財団は必ずやその成果を挙げ，わが国科学技術の発展に寄与するのみならず，世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

財団法人仁科記念財団寄附行為

第１章　総則

第１条　この法人は，財団法人仁科記念財団という。

第２条　この法人は，事務所を東京都文京区本駒込２丁目28番45号におく。

第２章　目的および事業

第３条　この法人は，故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して，原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り，もってわが国の学術および国民生活の向上発展，ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第４条　この法人は，前条の目的を達成するために，次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において，きわめて優秀な成果を収めた者に対する仁科記念賞の授与
2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章　資産および会計

第5条　この法人の資産は，次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. 賛助会費
6. その他の収入

第6条　この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の2種とする。

基本財産は，別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用資産は，基本財産以外の資産とする。ただし，寄附金品であって寄附者の指定あるものは，その指示に従う。

第7条　この法人の基本財産のうち，現金は，理事会の議決によって確実な有価証券を購入するか，または定期郵便貯金とし，もしくは確実な信託銀行に信託するか，または定期預金として理事長が保管する。

第8条　基本財産は，消費し，また担保に供してはならない。ただし，この法人の事業遂行上やむを得ない事由があるときは，理事会の議決を経，かつ文部科学大

臣の承認を受けて，その一部に限り処分し，または担保に供することができる。

第９条　この法人の事業遂行に要する費用は，資金から生ずる果実および事業に伴う収入等運用財産をもって支弁する。

第10条　この法人の事業計画およびこれに伴う収支予算は，毎会計年度の開始前に理事長が編成し，理事会の議決を経て文部科学大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

第11条　この法人の決算は，会計年度終了後,2箇月以内に理事長が作成し，財産目録，事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部科学大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは，理事会の議決を経て，その一部または全部を基本財産に編入し，あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条　収支予算で定めるものを除くほか，新たに義務の負担をし，また権利の放棄をしようとするときは，理事会の議決を経，かつ，文部科学大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもって償還する一時借入金を除く。）についても同様とする。

第13条　この法人の会計年度は，毎年４月１日に始まり，翌年３月31日に終る。

第４章　役員，評議員および職員

第14条　この法人には，次の役員をおく。

理事　20名以上25名以内

監事　２名以上４名以内

第15条　理事および監事は，評議員会でこれを選任し，理事は，互選で理事長１名，常務理事３名以内を定める。

第16条　理事長は，この法人の事務を総理し，この法人を代表する。

理事長に事故があるとき，または理事長が欠けたときは，理事長があらかじめ指名した常務理事が，その職務を代行する。

常務理事は，理事長を補佐し，理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。

第17条　理事は，理事会を組織し，この法人の業務を議決し執行する。

第18条　監事は，民法第59条に定める職務を行う。

第19条　この法人の役員の任期は,2年とする。ただし，再任を妨げない。

補欠による役員の任期は，前任者の残在期間とする。

役員は,その任期満了後でも,後任者が就任するまでは,なお,その職務を行う。

役員は，この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合，または，特別の事情のある場合には，その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条　役員は，有給とすることができる。

第21条　この法人には，評議員35名以上45名以内をおく。

評議員は，理事会でこれを選出し，理事長が委嘱する。

評議員には，第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは，「評議員」と読み替えるものとする。

第22条　評議員は，評議員会を組織し，この寄附行為に定める事項のほか，理事会の諮問に応じ，理事長に対して助言する。

第23条　この法人に顧問若干名をおくことができる。

顧問は，理事会でこれを選出し，理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には，同条中「役員」とあるのは，「顧問」と読み替えるものとする。

第24条　この法人の事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は，理事長が任免する。

職員は，有給とする。

第５章　会議

第25条　理事会は，毎年２回理事長が召集する。ただし，理事長が必要と認めた場合，または理事現在数の３分の１以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは，理事長は，臨時理事会を召集しなければならない。

理事会の議長は，理事長とする。

第26条　理事会は，理事現在数の３分の２以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし，当該議事について書面をもって，あらかじめ意思を表示した者は，出席者とみなす。

理事会の議事は，この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか，出席理事の過半数をもって決し，可否同数のときは議長が決する。

第27条　次に掲げる事項については，理事会において，あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項

2. 不動産の買入れ，または基本財産の処分に関する事項

3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は，評議員会にこれを準用する。この場合には，第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは，それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条　すべての会議には，議事録を作成し，議長および出席者代表2名が署名捺印した上で，これを保存しなければならない。

第6章　賛助会員

第29条　この法人に賛助会員をおく。賛助会員は，この法人の趣旨に賛同する団体，法人または個人であって別に定める規定により賛助会費を納入するものとする。

第7章　寄附行為の変更ならびに解散

第30条　この寄附行為は，理事現在数および評議員現在数のおのおのの3分の2以上の同意を経，かつ，文部科学大臣の認可を得なければ変更することができない。

第31条　この法人を解散するには，理事現在数および評議員現在数おのおのの4分の3以上の同意を経，かつ文部科学大臣の許可を受けなければならない。

第32条　この法人の解散に伴う残余財産は，理事全員の合意を経，かつ，文部科学大臣の許可を受けて，この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第8章　補則

第33条　この寄附行為の施行についての細則は，理事会の議決をもって別に定める。

付則

第34条　この法人の設立当初の理事および監事は，次のとおりである。

理事（理事長）　渋沢敬三
理事（常務理事）　朝永振一郎
理事（常務理事）　村越司
理事　石川一郎
理事　植村甲午郎
理事　亀山直人
理事　酒井杏之助
理事　瀬藤象二
理事　原安三郎
理事　藤山愛一郎
理事　我妻栄
監事　茅誠司
監事　武見太郎
監事　二見貴知雄

昭和34年６月１日　一部（事務所所在地）変更認可
昭和41年11月８日　一部（理事および評議員の定数）変更認可
平成２年７月27日　一部（評議員の定数）変更認可
平成３年７月８日　一部（賛助会費制の導入）変更認可
平成13年１月６日　一部（文部大臣）変更

役員および評議員名簿

（2003年４月１日現在，五十音順）

理事長　西島　和彦

常務理事　鎌田　甲一　鈴木　増雄　中根　良平

理　事　江崎玲於奈　鹿島　昭一　小林　俊一　庄山　悦彦　杉田　力之
関本　忠弘　千速　晃　野村　哲也　濱田　達二　林　主税
原　禮之助　平野　龍一　前田勝之助　宮島　龍興　山崎　敏光
若井　恒雄　渡里杉一郎

監　事　池田　長生　岡田　明重

評議員　秋元　勇巳　飯島　澄男　市村　宗武　江沢　洋　勝又　紘一
金森順次郎　上坪　宏道　木越　邦彦　古在　由秀　坂井　光夫
佐田登志夫　寿栄松宏仁　菅原　寛孝　杉本大一郎　高木丈太郎
高見　道生　田中　靖郎　玉木　英彦　土屋　荘次　戸塚　洋二
外村　彰　豊沢　豊　中井　浩二　西川　哲治　仁科雄一郎
西村　純　原　康夫　廣田　榮治　藤井　忠男　丸森　壽夫
宮　憲一　宮沢　弘成　安岡　弘志　山路　敬三　芳田　奎
吉田庄一郎　和田　昭允

付　録

仁科記念賞受賞者とその業績

年度	受賞者		受賞者業績
1955	大阪大学理学部	緒方　惟一	大型質量分析器の完成
	大阪市立大学理学部	西島　和彦	素粒子相互変換
1956	大阪大学理学部	芳田　奎	反強磁性体における磁気異方性エネルギー
	東京大学農学部	三井　進午	同位元素による植物の栄養ならびに土壌肥料学的研究
	農業技術研究所	西垣　晋	
	〃	江川　友治	
	蚕糸試験場	潮田　常三	
1957	東京大学理学部	久保　亮五	非可逆過程の統計力学
1958	大阪大学理学部	杉本　健三	原子核の励起状態の磁気能率，および電気四極子能率の測定
	東京教育大学理学部	沢田　克郎	電子ガスの相関エネルギーに関する研究
1959	ソニー㈱	江崎玲於奈	エサキダイオードの発明，およびその機能の理論的解明
	理化学研究所	中根　良平	化学交換反応による同位元素濃縮
1960	大阪府立大学理学部	吉森　昭夫	磁性結晶におけるスピンのらせん状配列の理論
1961	東京大学原子核研究所	丹生　潔	中間子多重発生の火の玉模型
	名古屋大学理学部	福井　崇時	ディスチャージチェンバーの研究と開発
	大阪市立大学理学部	宮本　重徳	
	京都大学理学部	松原　武生	量子統計力学の方法
1962	名古屋大学プラズマ研究所	高山　一男	低密度プラズマの研究――特に共鳴探針法の発明
	工業技術院電気試験所	佐々木　亘	ゲルマニウムの熱い電子の異方性の研究
1963	京都大学理学部	林　忠四郎	天体核現象の研究

年度	受賞者		受賞者業績
1964	東京大学理学部	岩田　義一	静電磁場における電子，およびイオンの運動に関する研究
	東京教育大学 光学研究所	瀬谷　正男	真空分光計に関する研究
1965	京都大学教養部 名古屋大学 プラズマ研究所	三谷　健次 田中　茂利	弱電離プラズマのサイクロトロン周波数における負吸収の研究
	大阪市立大学 理学部	三宅　三郎	宇宙線ミュー中間子およびニュートリノの研究
1966	東京大学 宇宙航空研究所	小田　稔	SCO-X-1 の位置決定
	東京大学 物性研究所	豊沢　豊	固体光物性の動力学的理論
1967	広島大学理学部 東京大学 原子核研究所	小川　修三 山口　嘉夫	基本粒子の対称性に関する研究
	東京大学 宇宙航空研究所	西村　純	超高エネルギー相互作用における横向き運動量の研究
1968	九州大学理学部	森　肇	非平衡状態の統計力学
	工業技術院 電気試験所	近藤　淳	希薄合金の抵抗極小の解明
1969	大阪大学教養部	松田　久	原子質量精密測定用大分散質量分析装置の開発
	名古屋大学 プラズマ研究所 京都大学理学部	池地　弘行 西川　恭治	イオン波エコーの研究
1970	学習院大学 理学部	木越　邦彦	炭素-14 による年代測定に関する研究
	東京大学理学部	西川　哲治	線型加速器に関する基礎研究
1971	東京大学 原子核研究所	菅原　寛孝	基本粒子の対称性の応用
	ミュンヘン工科 大学	森永　晴彦	インビームスペクトロスコピーの創出と原子核構造の研究

年度	受賞者		受賞者業績
1972	テンプル大学 物理学科	川崎　恭治	臨界現象の動力学的理論
	東北大学理学部	真木　和美	超伝導体の理論的研究
1973	京都大学 数理解析研究所	中西　襄	場の量子論における散乱振幅の諸性質の分析
	京都大学基礎物 理学研究所	佐藤　文隆	重力場方程式の新しい厳密解の発見とそれの宇宙物理学への応用
	広島大学理論物 理学研究所	冨松　彰	
1974	大阪大学教養部	大塚　顕三	半導体電子輸送現象のサイクロトロン共鳴による研究
	ニューヨーク市 立大学	崎田　文二	素粒子の超多重項理論および二重性理論の研究
1975	東京大学理学部	山崎　敏光	核磁気能率における中間子効果の発見
	東京大学 物性研究所	花村　榮一	多励起子系の理論的研究
1976	九州大学理学部	磯矢　彰	静電高圧加速器の研究とその新機軸の開発
	ロチェスター大 学理学部	大久保　進	強い相互作用による素粒子反応に対する選択規則の発見
	名古屋大学 理学部	飯塚重五郎	
1977	東京大学 物性研究所	塩谷　繁雄	ピコ秒分光法による半導体の高密度励起効果の研究
	京都大学基礎物 理学研究所	牧　二郎	素粒子の四元模型
	筑波大学 物理学系	原　康夫	
1978	分子科学研究所	廣田　榮治	高分解能高感度分光法によるフリーラディカルの研究
	東京大学理学部	有馬　朗人	原子核の集団運動現象の解明
	東京大学 原子核研究所	丸森　寿夫	

年度	受賞者	受賞者業績
1979	東京大学 物性研究所 守谷　亨	遍歴電子強磁性の理論
	高エネルギー物理学研究所 小林　誠 東京大学 原子核研究所 益川　敏英	基本粒子の模型に関する研究
1980	大阪大学理学部 伊達　宗行	超強磁場の発生
	東北大学原子核理学研究施設 鳥塚　賀治	原子核の巨大共鳴の研究
	京都大学理学部 九後汰一郎 プリンストン高級研究所 小嶋　泉	非可換ゲージ場の共変的量子化の理論
1981	東京大学 教養学部 杉本大一郎	近接連星系の星の進化
	高エネルギー物理学研究所 吉村　太彦	宇宙のバリオン数の起源
1982	筑波大学 物理工学系 安藤　恒也	MOS反転層における二次元電子系の理論的研究
	㈱日立製作所 中央研究所 外村　彰	電子線ホログラフィー法の開発とその応用
1983	フェルミ国立加速器研究所 山内　泰二	ウプシロン粒子の発見に対する貢献
	東京大学理学部 増田　彰正	希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用
1984	東京大学理学部 江口　徹 コーネル大学 川合　光	格子ゲージ理論
	東北大学理学部 石川　義和	中性子散乱による金属強磁性の研究
	学習院大学 理学部 川路　紳治	二次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究
1985	マサチューセッツ工科大学 田中　豊一	ゲルの相転移現象の研究
	新技術開発事業団 飯島　澄男	少数原子集団の動的観察
	宇宙科学研究所 田中　靖郎	てんま衛星による中性子星の研究

年度	受賞者		受賞者業績
1986	東京大学理学部	鈴木　増雄	相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学
	広島大学理論物理学研究所	藤川　和男	場の量子論における異常項の研究
	広島大学核融合理論研究センター	佐藤　哲也	散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミックス
1987	東京工業大学	高柳　邦夫	シリコンの表面構造の研究
	東京大学東京天文台	森本　雅樹	ミリ波天文学の開拓
	〃	海部　宣男	
	東海大学理学部	小柴　昌俊	超新星爆発に伴うニュートリノの検出
	東京大学理学部素粒子物理国際センター	戸塚　洋二	
	東京大学宇宙線研究所	須田　英博	
1988	名古屋大学理学部	松本　敏雄	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測
	大阪大学理学部	吉川　圭二	ひもの場の理論
	東京大学物性研究所	齋藤　軍治	有機超伝導体の新しい分子設計と合成
1989	理化学研究所	谷畑　勇夫	不安定原子核ビームによる原子核の研究
	東京大学理学部	野本　憲一	超新星の理論的研究
1990	東京大学理学部	佐藤　勝彦	素粒子論的宇宙論
	東京大学理学部	十倉　好紀	電子型銅酸化物超伝導体の発見
	高エネルギー物理学研究所	横谷　馨	リニアコライダーにおけるビーム相互作用の研究
1991	高エネルギー物理学研究所	北村　英男	挿入型放射光源の開発研究
	分子科学研究所	齋藤　修二	星間分子の分光学的研究
	東京大学理学部	和達　三樹	ソリトン物理学とその応用

年度	受賞者	受賞者業績
1992	NTT基礎研究所　山本　喜久	光子数スクイーズ状態の形成および自然放射の制御
	筑波大学 物質工学系　大貫　惇睦	遍歴する重い電子系のフェルミ面に関する研究
	新潟大学教養部　長谷川　彰	
	東北大学理学部　柳田　勉	ニュートリノ質量におけるシーソー機構
1993	核融合科学研究所　伊藤　公孝	高温プラズマにおける異常輸送とL-H遷移の理論
	九州大学 応用力学研究所　伊藤　早苗	
	理化学研究所　勝又　紘一	新しい型の磁気相転移の研究
1994	学習院大学 理学部　川畑　有郷	アンダーソン局在およびメソスコピック系における量子輸送現象の理論
	東京大学 原子核研究所　田辺　徹美	クーラーリングを用いた電子・分子イオン衝突の精密研究
	筑波大学 物理学系　岩崎　洋一	格子量子色力学の大規模数値シミュレーションによる研究
	筑波大学 物理学系　宇川　彰	
	高エネルギー物理学研究所　大川　正典	
	京都大学基礎物理学研究所　福来　正孝	
1995	東北大学大学院 理学研究科　佐藤　武郎	超低温における量子的相分離現象の実験的研究
	大阪大学大学院 工学研究科　川上　則雄	共形場理論に基づく１次元電子系の研究
	筑波大学 物理学系　梁　成吉	

年度	受賞者		受賞者業績
1996	日亜化学工業㈱開発部	中村　修二	短波長半導体レーザーの研究
	東北大学工学部	板谷　謹悟	固液界面でのアトムプロセスの解明に関する研究
	国立天文台電波天文系	中井　直正	銀河中心巨大ブラックホールの発見
	国立天文台電波天文系	井上　允	
	国立天文台地球回転研究系	三好　真	
1997	東京大学宇宙線研究所	木舟　正	超高エネルギーガンマー線天体の研究
	東京工業大学理学系研究科	谷森　達	
	名古屋大学理学部	三田　一郎	B中間子系でのCP対称性の破れの理論
	東京大学物性研究所	安岡　弘志	高温超伝導体におけるスピンギャップの発見
1998	青山学院大学理工学部	秋光　純	梯子型物質における超伝導の発見
	電気通信大学レーザー極限技術研究センター	清水富士夫	原子波ホログラフィーの開拓
	筑波大学物理学系	近藤　都登	トップクォーク発見に対する貢献
1999	九州大学理学部	井上　研三	超対称標準理論における電弱対称性の量子的破れ
	近畿大学九州工学部	角藤　亮	
	東京大学宇宙線研究所	梶田　隆章	大気ニュートリノ異常の発見
	日本電気㈱基礎研究所	中村　泰信	超伝導素子を用いたコヒーレント2準位系の観測と制御

年度	受賞者		受賞者業績
2000	東京大学大学院理学系研究科	折戸　周治	宇宙線反陽子の観測
	高エネルギー加速器研究機構低温工学センター	山本　明	
	イタリア Pisa 大学	小西　憲一	小西アノマリーの発見
	京都大学大学院理学研究科	堀内　昶	フェルミ粒子分子動力学による原子核の研究
2001	東京大学宇宙線研究所	鈴木洋一郎	太陽ニュートリノの精密観測によるニュートリノ振動の発見
	東京大学宇宙線研究所	中畑　雅行	
	高エネルギー加速器研究機構	高崎　史彦	B中間子におけるCP対称性の破れの発見
	高エネルギー加速器研究機構	生出　勝宣	
	大阪大学基礎工学部	天谷　喜一	超高圧下における酸素及び鉄の超伝導の発見
	大阪大学基礎工学部	清水　克哉	
2002	京都大学大学院理学研究科教授	小山　勝二	超新星残骸での宇宙線加速
	東京大学大学院理学系研究科教授	樽茶　清悟	人工原子・分子の実現
	大阪大学核物理研究センター教授	永井　泰樹	原子核による速中性子捕獲現象の研究
	東京工業大学原子炉工学研究所助教授	井頭　政之	

（受賞者の所属は受賞時のもの）

海外派遣研究者

年度	派遣者		研究目的	派遣先
1956	小林理学研究所	森田　正人	原子核理論，素粒子論の研究	アメリカ
	東京大学 教養学部	松浦　二郎	超ウラン元素の化学的研究	フランス
1957	東京大学 教養学部	小出昭一郎	結晶内における遷移金属イオンの諸性質の理論的研究	イギリス
	東京大学農学部	麻生　末雄	ラジオアイソトープの農学分野における利用	アメリカ
1958	立教大学理学部	伊藤　隆	生物体におよぼす放射線の影響	アメリカ
1959	東京大学大学院 数物系研究科	真隅　泰三	固体電子工学の基礎物理的研究	アメリカ
	東京大学 原子核研究所	磯矢　彰	サイクロトロンによる核反応の研究	アメリカ
1960	東京教育大学 理学部	池田　長生	放射化学，分析化学に関する新しい知見，技術の研究	ドイツ
	理化学研究所	佐田登志夫	機械工業における RI の利用	アメリカ
	東京大学 原子核研究所	菅　浩一	空気シャワーの研究	アメリカ
1961	東洋紡績㈱ 技術研究所	上田　寿	放射線の固体高分子化合物中に生じたラジカルの電子スピン共鳴吸収による研究	アメリカ
	北海道大学 理学部	渡辺　宏	結晶内 ions を marker として local な性質を調べる	イギリス
1962	大阪大学理学部	近藤　道也	加速器，ことに A.V.F. サイクロトロンの研究	アメリカ
	電電公社 電気通信研究所	新井　敏弘	磁界中における半導体の光学的諸性質の研究	イギリス
1963	東京大学応用微 生物研究所	金井　竜二	同位元素を用いた光合成機作の研究	ドイツ
1964	東京都立大学 理学部	金子洋三郎	原子衝突の実験に関する研究	イギリス

年度	派遣者		研究目的	派遣先
1965	ソニー㈱研究所	森垣　和夫	半導体内の電子状態の研究	フランス
1966	大阪大学理学部	溝淵　明	Van de Graaff 型加速装置を用いた原子核反応による核構造の研究	アメリカ
	東京大学大学院理学系研究科	香村　俊武	素粒子の原子核反応，重粒子間の相互作用の研究	イギリス
1967	京都大学理学部	牟田　泰三	場の理論における複合粒子の条件	イギリス
	東京大学原子核研究所	黒田　育子	原子核(中重核)の多体問題的方法，およびその構造について研究	デンマーク
1968	東京大学理学部	池田　清美	原子核構造の種々の側面の理論的追求	ソ連，デンマーク
1969	東京大学理学部	山崎　昶	核磁気共鳴とその応用	ドイツ
1970	東京大学教養学部	林　憲二	素粒子論ハドロンの表現	ドイツ
	東京大学原子核研究所	永野　元彦	(1)水平シャワーの観測と解釈 (2)空気シャワーの芯の研究	ドイツ
1971	東京大学原子核研究所	石原　正泰	インビームγ線を用いた原子核構造，核反応の研究	スウェーデン
	東京大学物性研究所	栗田　進	イオン結晶の遠赤外レーザーによるサイクロトロン共鳴，および帯間磁気光吸収の精密な測定により励起子および電子のポーラロン効果を研究	アメリカ
1972	東京工業大学理学部	八田　一郎	誘電体の相転移の動的機構	イギリス
	東京都立大学理学部	広瀬　立成	反核子偏極の測定及び$\bar{p}p$消滅における多重発生の研究	ドイツ
1973	東京大学理学部	永宮　正治	原子核の励起状態の電磁気的性質の研究，および核スピンの物質中での超微細相互作用の研究	アメリカ
	東京大学工学部	海老沢丕道	(1)第二種超伝導体の輸送現象 (2)量子液体の磁気的性質の研究	アメリカ
1974	東京大学理学部	高木　伸	液体ヘリウム3の異常相の理論的研究	イギリス

年度	派遣者		研究目的	派遣先
1974	大阪大学教養部	大山　忠司	高密度励起子系における凝縮相の安定性とバンド構造の関係の研究	アメリカ
1975	東北大学 金属材料研究所	黒田　規敬	層状半導体における非線形磁気光学効果の研究	アメリカ
	大阪大学理学部	仲伏　廣光	二段二重収束質量分析装置による原子質量の精密測定－原子質量の精密測定用 RF 質量分析計の再建作業，およびこれによる原子質量測定の研究	オランダ
1976	東北大学理学部	新村　信雄	TOF 中性子回折法による過渡現象の研究	デンマーク
	京都大学理学部	松柳　研一	中重核における集団励起モードの微視的理論の研究	デンマーク
1977	京都大学基礎物理学研究所	山脇　幸一	光的量子化の特徴である波動関数を用いてハドロン共鳴の分類の研究	アメリカ
	大阪大学理学部	片山　信一	Ⅳ—Ⅵ族化合物半導体の構造相転移の研究	アメリカ
	京都大学基礎物理学研究所	氷上　　忍	相転移と臨界現象を理論的に研究	アメリカ
1978	筑波大学 物理学系	外山　　学	原子核反応の機構についての研究	アメリカ
	東京大学理学部	小野　義正	超流動 ^{3}He の輸送現象の研究	アメリカ
	東京大学 宇宙線研究所	倉又　秀一	原子核乾板と他の測定器の複合装置を用いて行なわれるニュートリノ反応による新素粒子研究実験への参加	アメリカ
1979	大阪大学工学部	田口　常正	Ⅱ－Ⅵ半導体の格子欠陥の生成，消滅機構の研究	イギリス
	岡山大学工学部	東辻　浩夫	高密度プラズマの理論	アメリカ
1980	横浜国立大学 教育学部	佐々木　賢	ノンレプトニック崩壊などの諸現象を量子色力学を用いて研究	アメリカ
	早稲田大学理工学研究所学生	玉田　雅宣	宇宙線を用いた超高エネルギー核衝突による新しい型の核相互作用の研究	ソビエト

年度	派遣者	研究目的	派遣先
1980	新潟大学理学部　鈴木　宜之	軽い核におけるクラスター構造と高励起エネルギーでの分子的共鳴	アメリカ
1981	東京都立大学理学部　遠藤　和豊	同時計数メスバウア分光法により，壊変によって生じる不安定な化学種の時間的推移をしらべる研究	ドイツ
	名古屋大学理学部　三宅　和正	超流動の物理の理論的研究	イギリス
1982	東京大学大学院理学系研究科　手嶋　久三	anomalous Ward identity における発散の処理の再検討及び dynamical Higgs mechanism の模型と 100 GeV 領域の現象への反映	アメリカ
	大阪大学理学部　城　健男	磁気体積効果等の物性の研究及び photoemission の実験で得られている動的な現象の理論的研究	イギリス
1983	北海道大学工学部　住吉　孝	放射線化学初期過程の研究にピコ秒の時間分解能を有する電気伝導法を用い，従来からの種々の高速分光法とあわせて詳細な解明をおこなう	西ドイツ
1984	立教大学理学部　鈴木　昌世	電離放射線励起及び光励起に基づく希ガス・シンチレーション（混合系，凝縮層を含む）に関する実験的研究	スイス
	東京大学理学部　梁　成吉	格子量子色力学，クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の解明	デンマーク
1985	京都大学理学部　清水　良文	高スピン状態における原子核の分光学的研究	デンマーク
1986	大阪大学教養部　川村　光	相転移現象の統計力学的研究	アメリカ
	理化学研究所　神原　正	加速器を用いた原子衝突過程の実験	西ドイツ
1987	東京大学教養学部　原　隆	構成的場の理論及び厳密統計力学	アメリカ
	東京大学大型計算機センター　吉永　尚孝	16 重極の自由度と相互作用するボソン模型	イギリス
	琉球大学理学部　中里　弘道	確率過程量子化法とその応用	デンマーク

年度	派遣者	研究目的	派遣先
1988	東京大学 教養学部 錦織 紳一	金属錯体をホストとする包接化合物の化学	カナダ
	東京大学理学部 松尾 泰	ひも理論の幾何学的量子化	アメリカ
1989	京都大学基礎物理学研究所 武末 真二	可逆セルオートマトンの熱力学的振舞	アメリカ
	京都大学教養部 小林健一郎	Conformal Field Theory と String のコンパクト化	アメリカ
	東北大学理学部 高木 滋	希土類及びウランの化合物での重い電子系の物性研究	スイス
1990	東京大学 物性研究所 福山 寛	超低温・高磁場下での固体^{3}He の核磁性	アメリカ
	慶應義塾大学 理工学部 高野 宏	ランダム・スピン系における緩和現象の統計力学的研究	イギリス
	高エネルギー物理学研究所 石橋 延幸	二次元の場の量子論と弦理論	アメリカ
	京都大学基礎物理学研究所 松尾 正之	原子核における大振幅集団運動の理論的研究	デンマーク
1991	新潟大学理学部 矢花 一浩	原子核理論	アメリカ
	大阪大学教養部 小堀 裕己	物性実験	アメリカ
	京都大学基礎物理学研究所 菅野 浩明	重力理論	イギリス
1992	東京大学 教養学部 松田 祐司	高温超伝導実験	アメリカ
	高エネルギー物理学研究所 野尻美保子	素粒子理論	アメリカ
	理化学研究所 小島 隆夫	低エネルギーイオン分子反応実験	アメリカ
1993	広島大学理学部物理学科 大野木哲也	素粒子論	アメリカ
	広島大学理学部物性学科 森 弘之	物性理論	アメリカ
	順天堂大学医学部物理研究室 中田 仁	原子核理論	アメリカ

年度	派遣者	研究目的	派遣先
1993	学習院大学 理学部化学科 加藤　隆二	放射線化学	ドイツ
1994	東京大学理学部 立川　真樹	赤外ガスレーザーにおけるレーザー不安定の発生機構	アメリカ
	東北大学 科学計測研究所 松井　広志	極低温におけるヘビーフェルミオンの音響的ドハース-ファンアルフェン効果	イギリス
	東京大学 原子核研究所 綿引　芳之	ゲージ理論および格子理論による重力の量子化	デンマーク
1995	東京大学理学部 羽田野直道	量子多体系の基底状態相転移	アメリカ
	横浜国立大学 工学部 武田　淳	一次元絶縁体の光誘起欠陥状態に関する分光学的研究，有機フォトクロミック化合物の光誘起相転移現象の研究	アメリカ
	茨城大学 理学部 西森　拓	砂地形の非線形動力学	デンマーク
1996	高エネルギー研究所 磯　暁	場の量子論と物性物理への応用	アメリカ
	ルイ・パストゥール大学 小田　玲子	荷電棒状ミセルの構造とその相転移	フランス
1997	N.B.I.日本学術振興会海外特別研究員 佐藤　晴正	世界線形式に基づいた Bern-Kosower 規則の研究	ドイツ
	N.B.I.日本学術振興会海外特別研究員 西垣　真祐	量子力学のカイラル対称性の破れのランダム行列理論による記述	アメリカ
1998	高知大学理学部 津江　保彦	ハドロン物質の相移転のダイナミックス	フランス
1999	早稲田大学Ｄ３（学振） 長岡　克巳	超伝導針を STM 探針に用いた超伝導体表面の電子状態の観測	アメリカ
2000	京都大学基礎物理学研究所 阪口　真	Brane の幾何学的定式化	イギリス

年度	派遣者	研究目的	派遣先
2000	東京工業大学D 3　大友　明	ZnO量子構造	アメリカ
2001	東京大学工学部　守田　佳史	二次元量子系における乱れに起因する臨界現象	アメリカ
	学習院大学理学部　矢野　陽子	液体表面の構造	アメリカ
2002	名古屋大学D 3　住　貴宏	重力マイクロレンズを用いた銀河暗黒物質，銀河構造及び系外惑星の研究	アメリカ
	CERN 理論部研究員　西村まどか	超弦理論における双対性の超重力理論による研究	アメリカ
	姫路工業大学理学部　長谷川太郎	イオントラップ中の冷却イオンと希ガス間のスピン移行の研究	アメリカ

（派遣者の所属は派遣時のもの）

途上国若手招聘研究者

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1992	ベトナム原子力研究所 理論計算機物理部長 Vo Hong Anh	プラズマ中の非線形波動と不安定性の理論	国立核融合研究所 市川芳彦教授
	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室教授 Duong Van Phi	素粒子論	東京大学理学部，原子核研究所，高エネルギー研 神奈川大学理学部 宮沢弘成教授
	ポーランド・ミッキェビッチ大学物理学科上級助講師 Adam Lipowsky	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授
1993	ベトナム・ハノイ理論物理研究所研究員 Hoang Ngoc Long	電磁場における重力子の光子への変換	高エネルギー物理学研究所 湯川哲之教授
	ベトナム・ハノイ理論物理研究所教授 Nguyen Ai Viet	固体物理理論 Metallic carbon nanotube における格子不安定性	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
	中国・厦門大学物理学科講師 Lin Ting Ting	素粒子論 CP violation and B-physics	高エネルギー物理学研究所 小林誠教授
1994	ベトナム原子力研究所核科学技術研究所理論計算機物理部原子核理論主任研究員 Nguyen Dinh Dang	原子核理論	東京大学原子核研究所 赤石義紀教授
	中国・清華大学物理学科 助教授 王青	素粒子論，中性Kメソン物理，CPTの破れ，ゲージ理論	名古屋大学理学部 三田一郎教授
	スロバキア科学アカデミー物理研究所研究員 Miroslav Kolesik	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1994	中国・復旦大学物理研究所 研究員 胡長武	C_{60}	東北大学金属材料研究所 粕谷厚生助教授
1995	ベトナム・フエ大学物理学科 講師 Nguyen Trung Dan	表面物理	東京大学工学部 花村榮一教授
1996	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室講師 Truong Ba Ha	結晶物理，物性理論	早稲田大学理工学部 大槻義彦教授
	ベトナム・ハノイ大学講師 Fam Le Kien	量子光学理論	電気通信大学レーザー極限技術研究センター 清水和子助教授
1997	中国科学院研究生院物理部 副教授 蘇　　剛	統計物理	東京理科大学理学部 鈴木増雄教授
	ベトナム原子力研究所 理論物理部 Nguyen Hong Son	物性理論	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
1998	ベトナム国立自然科学・工学センター Le Hong Khiem	不安定原子核の反応	理化学研究所 リニアック研 谷畑勇夫主任研究員
	ベトナム国立自然科学・工学センター Ho Trung Dung	超放射レーザーに関する研究	電気通信大学 氏原紀久男教授
1999	ベトナム国立自然科学・工学センター Nguyen Quang Hong	量子ドット励起子の荷電効果	電気通信大学 名取晃子教授
	ベトナム・ハノイ物理学研究所 Nguyen Anh Ky	素粒子標準理論と331模型	中央大学理工学部 稲見武夫教授

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
2000	ベトナム・フエ市科学技術環境局 Le Viet Dung	素粒子物理学	高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 清水韶光教授
2001	グルジア・トビリシ・ラジマゼ数学研究所 G. Tsitsishvili	素粒子論	東北大学理学部 江沢潤一教授
	ベトナム・ホーチミン市物理研究所 Cao Huy Thien	物性理論	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
2002	ベトナム・ハノイ教育大学 Dang Van Soa	素粒子論	中央大学理工学部 稲見武夫教授
	台湾・ニューヨーク州立大学院生 Shu-Chiuan Chang	統計力学	東京理科大学理学部 鈴木増雄教授
	グルジア・ラズマゼ数学研究所 Zakaria Giunashvili	量子情報理論	横浜市立大学理学部 藤井一幸教授

（招聘研究者の所属は招聘時のもの）

財団法人 仁科記念財団
〒113-8941 東京都文京区本駒込2丁目28番45号
電 話 東 京 03（3942）1718
郵便振替番号 00130-5-135934
ホームページ http://www.nishina-mf.or.jp
E-mail : nkz@nishina-mf.or.jp

©仁科記念財団 （2003年6月）1,000